

【2021 年度自己点検・評価のテーマ】

○センター

センターの目的の達成状況及びそれを確認するためのデータ・指標・体制等の現状

○学部

アドミッション・ポリシー（AP）・ディプロマ・ポリシー（DP）の達成状況及びそれを確認するためのデータ・指標・体制等の現状

教養教育センター

1. 自己点検・評価結果

当センターの目的は、教養教育を企画・実施し、さらに充実させることです。2021 年度に本学の教養教育は「県大世界あいち学」として新たなカリキュラムが開始されたので、本年度の当センターにおける自己点検・評価の対象はおもに二つに決めました。ひとつが新カリキュラムの実施および運営に関するもの、ふたつ目は 3 種類の企画、すなわち、21 年度後期に向けた新カリ科目の企画、21 年度の授業実施結果を受けての 22 年度に向けた修正企画、さらに 22 年度以降に新たに開講される新カリ科目の企画に関するものとなります。実施、企画のいずれにしても、新カリの理念を体現しかつ特徴的な新設科目を重点的に点検・評価することとし、新カリキュラム改革の目玉でもある 1 年次必修、5 学部連携の「APU 教養コア科目」、すなわち「多文化社会への招待」と「データサイエンスへの招待」の実施・企画に関する点検・評価を本報告の中心とします。続いて、教養教育新カリキュラム全体の運営に関する自己点検・評価報告をおこないます。

(1)「多文化社会への招待」について：当該科目は、前期開講であり、現センターは企画段階においてほとんど参画する余地がなかったため、実施後の FD および授業アンケートを中心に点検・評価をおこなった。評価は次の通りである。新型コロナウイルスの感染が拡大していた前期の開講だったため、遠隔授業をメインとして実施し、グループワークもオンラインで実施することになったが、次のような工夫を施すことで、うまく進行することができた。①5 回実施したグループワークでは、5 回とも異なるメンバーで行う方法を取ることで役割の固定化や惰性を防止し、異なる学部学生の様々な考え方を共有できるようにしたことが功を奏した。②具体的な成果動画作成の指示を出したので、各学生が主体的に取り組む姿がみられたと同時に、本科目の主旨でもある「多文化社会」理解における伝えることの難しさや、相手の考えを汲み取る力の必要性を、グループワークを通じて学生自身が感じ取っていた。全学生必修という初めての試みであったが、単位取得率は 99%を超し、レベル設定や運営法が妥当だったと評価できる。

(2)「データサイエンスへの招待」について：本科目は後期開講であったため、また、授業運営について前期の段階でほとんど詰められていなかったため、10 月開講に向けての企画が重要な作業となった。担当教員を 6 種のチーム（「TA・機器担当」「クラス担任」「グループワーク担当」「事例紹介担当」「演習用データ担当」「講義資料作成担当」）に分け、8 月から 9 月にかけて、チーム別ミーティングを各 2 回、全体ミーティング 2 回、延べ 14 回のミーティングを経て、1 年生全員全 14 クラスが同一の資料を用いて、同一の内容を学習できるよう最善の策を講じた。講義資料の妥当性は当然のこととして、地域連携を意識して演習用データを愛知県関係のものにしたり、5 学部の異なる専門分野の教員による事例紹介を通じて、全学部の学生にデータサイエンスへの関心を喚起したりするなどして、さまざまな工夫を施した。また、TA を 9 名採用し、データサイエンスに不慣れな学生のケアや、グループワークにおける作業促進の一助とした。授業回が約半分に達した段階（11 月末）で、あらためて全体ミーティングを開き、反省点などをふまえて後半の講義に向けて問題意識を共有した。特に、第 4 回、5 回の「事例紹介」回での

学生からの質問や学生間の討議が不活発だったことを受け、第 14 回の「事例紹介」では反転授業を試みることにし、その結果、学生からの質問と討議がすこぶる活性化された。全授業終了後（2 月）には再び全体ミーティングを開催し、来年度以降の改善に向けた総括をおこなった。このように、学部の枠を越えて、何度も打ち合わせや試行錯誤を重ねて企画と実施を遂行できたことは、高く評価できる。

(3) 新カリキュラム全体の運営に関する点検・評価について：4 つの視点から点検・評価をおこなった。

①FD を通じた新カリ実施科目の点検について：FD は各科目群別におこない、新たに設置された科目のうち、前期に開講された科目を中心に振り返りをおこない、問題点を抽出した。また、本学の特徴の一つである外国語科目に関しては、例年通り、英語、スペイン語、ポルトガル語で、非常勤講師も加えて本年度の教育を振り返り、来年度に向け改善点を検討した。

②2022 年度に新規開講される 2 年次以上が履修する APU 連携科目（4 科目）につき、科目会議を数度開催し、科目デザインをブラッシュアップした。

③教育環境の整備について：三菱みらい育成財団の助成金を獲得できたことで、グループワーク用のタブレットやその他の学習支援機器を多数導入することができ、教育環境の整備を図れたことは、高く評価できる。また、同助成金により、次年度開講の APU 連携科目で、連携する地域企業や行政組織から招聘する外部講師への謝金や、FD 等に非常勤講師の方々を招待する予算の目処をつけることができた。

④学習支援システムについて：学生が教養教育科目の履修状況を自己管理できる「カリフラワー」の運用を開始した。新年度当初は、アクセス集中のため登録が滞ったので、学部学科別の分散化をおこない対応した。システム自体、全学的システムに組み込む方向で検討を重ねている。

以上、順調な運営をおこなっていると評価できるが、④のカリフラワーに関しては未だ問題があり、来年度以降も検討する必要がある。

2. 今後の課題及び改善案

(1) 「多文化社会への招待」について：担当者決定から授業開講までの期間が短く、5 学部教員間の意思の統一が困難であった。授業アンケートの集計結果を見ると、オンライン講義特有の課題が顕著に出ていた。それは、授業中の「質問」のしにくさに関するもので、教員から質問を求められても、他の学生の様子が分からない中で挙手機能を用いることに躊躇する学生がいる一方、教授者側も、質問を求めたあとの沈黙の時間が長く感じられ、質問コーナーを早めに切り上げてしまいがちとなり、学生側は今度はそれを質問機会の喪失ととらえることもあり、負の連鎖が見受けられた。そこで、来年度に向けては、チャット欄の利用をうながす、反転授業の要素を取り入れて授業前に質問収集をおこなうなどの形式を検討している。また、FD での意見を踏まえ、キャリアに関する回を割愛し、その代わりに、最後に「振り返り」の回を設けることとした。

(2) 「データサイエンスへの招待」について：同時に同じ担当者が複数クラスで講義を行う必要があり、その際、ネットワークを使って同時中継する方法をとったが、ネットのタイムラグがあり質問を受ける際、スムーズに実施することができないことがあった。2022 年度はパソコン端末のある教室を使用し、実際にエクセルソフトを使用し、講義時に課題を出し、授業時間内に取り組み方法を行うことで、課題解決を図る予定である。学生アンケートとしては、大学全体でおこなったものに加え、科目独自のアンケートも行い、現在その結果分析中であり、それを踏まえて、次年度 10 月開講に向けて、再度授業内容をブラッシュアップする。

以上。